「中山世譜 附巻」の情報化

豊見山 和行：琉球大学教育学部

「中山世譜附巻」は、正巻が主に琉球国内と対中国関係を中心に編纂されている（*：正巻のフルテキストについては赤嶺守氏の解説、参照）。

一方、この附巻の特徴は、対日本（主に薩摩）関係を中心に編纂されている。琉球国における史書の編纂は、一六五〇年に『中山世鑑』として羽地朝秀（向象賢）によって著されたものを始まりとする。『中山世鑑』が和文で記述されていたことから、それを一七〇一年に漢訳したのが、蔡鐸による『中山世譜』（蔡鐸本）である。『世譜』が、たんなる漢訳に止まらず、田名真之氏によると、第一に世鑑から世譜への署名の変更、第二に記事の増加・訂正、第三に一定の編集方針に基づく記述形式、第四に琉球・薩摩関係記事と附巻を新設したこと、以上の四点を特徴とする（同「史書を編む―中山世鑑・中山世譜」）。

その蔡鐸本を再度編纂し直したのが、一七二五年の蔡温による『中山世譜』（蔡温本）である。正巻にある附巻（尚懿・尚久に関する記事）とは別に、琉球・薩摩関係記事をさらに「附巻」として独立させた点に特徴がある。ただし、琉・薩関係の「附巻」は、蔡温ではなく鄭秉哲によって作成された（同上、田名論考）。

本『中山世譜附巻』テキストデータは、蔡温本によるものであるが、琉球・薩摩関係に関わる編年史料には、「大和え御使者記」（和文、未刊行、200丁、東大史料編纂所蔵）がある。今後は、「大和え御使者記」と『中山世譜附巻』を照合して使用する必要があろう。

『中山世譜附巻』を理解する上での論文には、以下のものがある。

①東恩納寛惇「中山世鑑・中山世譜及び球陽」（『琉球史料叢書』第5巻、名取書店、1942年）。

②田名真之「史書を編む―中山世鑑・中山世譜」（同『沖縄近世史の諸相』ひるぎ社、1992年）。

さて、本『中山世譜附巻』のテキストデータは、伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編『琉球史料叢書』第5巻を基礎にしている。ただし、テキスト検索上での便宜を以下のように図った。

*1：現在のパソコンで表示されない漢字は、☆印を合成字の両脇に付けて表示した（詳しくは、桶谷氏＜「琉球家譜」の情報化と漢字処理＞を参照のこと）。

*2：年号表記において、次のように加工した。本来、本文記事の冒頭では、「同年」あるいは「同五年」等のように年号を省略して記載されている場合が多い。それらを「同八年」とあれば、その直前の年号を付して、例えば「＜萬暦＞八年」のように中国年号を括弧で括って明示した。その点で、本テキストデータは、『琉球史料叢書』版と完全に一致するものではない。

『中山世譜附巻』テキストデータの一部

中山世譜附巻之一

尚清王
嘉靖年間。爲紋船使事。遣天界寺月泉長老・世名城主良仲。到薩州。＜年月不傳＞
又爲紋船使事。遣薛氏賀章。＜後曰江洲＞到薩州。＜年月日不傳＞

尚永王
萬曆五年丁丑。爲紋船使事。遣天界寺修翁和尚。到薩州。＜月日不傳＞
＜萬曆＞八年庚辰。爲紋船使事。遣普門寺和尚。到薩州。＜月日不傳＞
＜萬曆＞十三年乙酉。爲紋船使事。遣天龍寺桃庵長老・孟氏安谷屋親雲上宗春。到大坂。＜月日不傳＞

尚寧王
萬曆十九年辛卯。爲紋船使事。遣建善寺大龜和尚・茂留味大屋子。到薩州。＜月日不傳＞／又爲紋船使事。遣護國寺快雄座主・大里大屋子。到薩州。＜年月不傳＞
＜萬曆＞二十一年癸巳。爲紋船使事。遣天王寺菊隱長老・金氏摩文仁親方安恒。到薩州。赴京＜月日不傳＞／又爲紋船使事。遣蔡氏中村渠筑登之親雲上政茂。到薩州。＜年月不傳
＞
＜萬曆＞三十七年己酉。薩州太守家久公。遣師征伐。／原是本國。與薩州爲隣交。紋船往來者。至今百有餘年。奈信權臣邪名之言。遂失聘問之禮。由是。樺山權左衛門・平田太郎左衛門等。奉　命來伐。小大難敵。投誠而降。王從彼師。到于薩州。／至辛亥年。王已回國。
＜萬曆＞三十八年庚戌。爲問安尚寧王。在薩州事。遣馬氏勝連親雲上良繼。到薩州。翌年九月回國。
本＜萬曆三十八＞年。薩州太守。遣本田伊賀守等。都鄙有章。上下有分。又遣阿多氏等。均井地。正經界。而始爲賦税。從此每年。納貢于薩州。永著爲例。
＜萬曆＞三十九年辛亥。家久公。出賜琉球。一紙目録。此時。鬼界・大島・徳島・永良部・與論。始屬薩州。／然彼五島。原係吾國管轄之地。故容貌衣服。迄今留。與吾國。無以相異。
本＜萬曆三十九＞年。爲禀明。進貢王舅。事竣回國事。遣毛氏池城親方安頼。到薩州。又赴駿府。其冬回國。／＜萬曆己酉(三十七年)。安頼扈從尚寧王。在薩州。家久公。遣伊勢兵部少輔・鎌田左京亮曰。中國若聞中山爲我附庸。嗣後不可以爲進貢。當早遣安頼。以爲納款云。／由是。從尚氏具志頭王子朝盛。回國。
翌＜萬曆四十＞年正月二十日。安頼爲乞體恤遭難。兼贖修貢職事。奉　命爲王舅。同長

史金應魁。使者兪氏重光等。坐駕楷船。入☆門虫☆赴京。辛亥夏。事竣歸國。即赴薩州復命。又赴駿府。以聞將軍家康公。而回國＞
本＜萬曆四十＞年爲國賀事。遣金氏摩文仁親方安恒。六月到薩州。翌年。安恒沾病回國。嫡子松金安基。代父留薩州。癸丑十二月回國。＜松金。奉薩州命。與父俱赴薩州＞
＜萬曆＞四十年壬子。爲國賀事。遣向氏伊江按司朝仲・向氏羽地按司朝安。到薩州。至甲寅年回國。
＜萬曆＞四十一年癸丑。爲年頭使事。遣馬氏伊計親雲上良德。到薩州。本年回國。＜年頭使。自此而始＞
本＜萬曆四十一＞年。爲賀家久公。誕生男子事。遣向氏讀谷山按司朝宜。到薩州。其秋回國。